

船木みあさ氏の発表についての

質疑応答

(質問者 2 名)

【質問】 中畑正志 (京都大学)

以下、質問を挙げますが、その質問を通して著者に望みたいことは、全体としてきわめて一般的な主張が必ずしも十分な根拠が示されないまま提示されているので、学術論文であれば、根拠や証拠にもとづいて、主張を展開するようにしてほしいということです。

1 この論文は「現代日本において、日本人の柔軟な思考力と澄んだ観察眼を端緒とする学問の誕生を模索した」とあります。これはそのような学問がまだ日本には生まれていないと判断していることになりますが、そのように判断する根拠は何でしょうか。

2 この論文は著者が「日本人」と呼ぶグループと「欧米人」と呼ぶグループとの自然観察の相違を強調していますが、その前提には「日本人」と「欧米人」はそれぞれの集団内では、同じような観察の仕方をするということを前提としています。しかし

(i) 「欧米人」というのは、性別や人種、年齢を問わずいわゆる西欧諸国に居住するすべての人を含む概念でしょうが、その自然観察にそのような一致した傾向を見出すことができるのでしょうか。

(ii) 「日本人」と「欧米人」との「自然観察」の相違という、きわめて大きな命題の証拠になっているのは「サル学」の例だけです。これはそのような包括的な主張のためには十分な証拠とは言えないように思われます。

3 「哲学」という訳語の成立について、「日本人のこの立ち位置の微妙さは、哲学という訳語をめぐる議論にも見られる。哲学という訳語が考案された当時、全体が把握されていたとは考えにくい。現在から見ると、非常に限られた部分を指した訳語であったであろう。」と著者は考えていますが、これは推測のように見えます。このように主張するのであれば、西周が「希哲学」「希賢学」などの訳語をどのような背景や文脈のなかでつくったとお考えでしょうか。

4 「そこで、今ここで、敢えて、哲学という訳語の意味する内容を、この言葉の考案時に指した内容。と、定義する。すると、定義上、日本に哲学は無い。日本にあるのは、日本列島に移り住んだ人々が自らの歴史、文化を編み出した内面的な働きである。」

この文の意味を理解することは困難です。

(i) 「この言葉の考案時に指した内容」とは何かが示されていません。3でも指摘したように、その言葉がつくられたときに指した内容が何であることを示すべきです。

(ii) なぜ「この言葉の考案時に指した内容」と定義すると、定義上、「日本には哲学は無い」ことになるのでしょうか。その定義内容がわからないので、その根拠がわかりません。また、かりに西周が「哲学」の内容として西洋哲学を意識していたとしても、それが日本に無かったとはかぎりません。それと同様の営みがなかったとどうして断定できるのでしょうか。

5 日本神話について「分かりやすく、微笑ましいほど素直ですんなりした筋書きで、説得力は無いが納得のいく内容である」「表面上の違いにとらわれず、柔軟に対処して合意できそうなところを見極め、まるくおさめて事を運ぶのを好む傾向」などいくつかの発言がありますが、その主張を支える根拠は挙げられていないため、著者の感想、ないしは一方的断定になっているように見えますが、どうでしょうか。

6 「日本に横書きが伝わった頃、日本人はピロソピアーという言葉を知った」とありますが、これはいつのことを想定しているのでしょうかわかりません。16世紀の宣教師、とりわけペドロ・ゴメスなどのことでしょうか。

7 四章の全体とりわけその始めの部分は、個人的な想いが書かれています。それは著者自身にとっては大切でしょうが、学会で共有し互いの理解を深めるための公共的な言葉になっていないので、公共的な言葉に置き換えられることを望みます。

また、句点が不適切に使用されている箇所があるので、気をつけてください。

「この言葉の考案時に指した内容。と、定義する。」

「その欲求を満たす学問が誕生する契機が既にある。と、見る。」

【回答】 船木みあさ（京都大学）

1 「ない」ということ証明することは難しく、私の表現に配慮が欠けていたかも知れません。現代日本で始められ、かつ自然観察から哲学的思考を導くことを目的とする講義を京都大学の理系科目として求め、一番近いところで理学部提供の「人類学」があり、受講した結果、哲学的思考をしている訳ではなかったことが根拠です。

2 私の論文の内容は、主に京都大学で受けた教育に基づいています。

(i) 生態学の講義内容を根拠としました。この学問は欧米で誕生した学問です。とりわけ、行動生態学では、生殖行動(結果としての遺伝も含む)と摂食行動による説明がほとんどです。この流れを「動物にとって、子作りに関わる活動は生の一部であり、さらにまた、食餌[養育]に関わる活動はもう一つの部分であって、実際、すべての動物の関心と生[生き方]は、まさにこの二つの事柄に関わっている。」(内山勝利 神崎繁 中畑正志 編集委員 『アリストテレス全集 9』 岩波書店 2015年 第七巻 第一章 589a2-4)まで遡りました。この影響は、欧米人の観察方法に強い影響を及ぼしていると、推測しています。

(ii) 本論文において自然観察に関して、絵画による例もあげています。絵画において、西洋の印象派は日本の浮世絵に驚き、強く影響を受けた事実等、自然観察の相違と考えられます。

更に、音楽は自然を表現するという要素があります。曲の拍子の取り方の相違もあげることができます。

本論文においては、学術以外に芸術も考察対象にしています。

3 本来、ご指摘の考察も論じるべきところですが、藤田正勝「日本における「哲学」の受容」(『哲学史の哲学』岩波書店 2009年)にまとめられている内容を承知している。ということとを述べるにとどめさせていただきます。

4 (i) 説明不足でした。「西はなぜ「哲学」という訳を選んだのであろうか。西の意図を押し量る手がかりになると思われるのは、」(藤田正勝「日本における「哲学」の受容」同 p. 261)とあります。推測の域を出ないことは確かですが、本論文では、西周の意図の範囲内の哲学を指しています。

(ii) 「この言葉の考案時に指した内容」は、前述の通りです。

ご指摘の通り、「同様の営みがある」ということを、本論文では主要な主張とするため、全ての集団がつくる円が重なり合う核心部の要素の一つとして、「知を愛求す」という内面的な働き。という要素を考え、それを頼りにピロソピアを理解しようと努めた。と致しました。しかし、一つのまとまった思想は、そのまとまりで考える必要があると考えます。そのまとまりそのものは日本に無かったが、既に共有し理解している部分を手がかりに、理解を試みてきた。と考えています。

5 私の勉強不足かも知れませんが、「是に其の妹伊耶那美命に問ひて曰りたまはく、「汝が身は如何か成れる」とのりたまへば、答白へたまはく、「吾が身は成り成りて成り合わざる処一処在り」とこたへたまひき。爾に伊耶那岐命詔りたまはく、「我が身は成り成りて成り余れる処一処在り。」故、この吾が身の成り余れる処を以ちて、汝が身の成り合わざる処に刺し塞ぎて、国土を生み成さむと以為ふ。生むこと奈何」(萩原浅男 鴻巣隼雄 校注・訳『古事記 上代歌謡』日本古典文学全集 1 小学館 1973年)という箇所など、念頭に置いていま

す。

6 誤解を招く書き方になっていました。「哲学」という言葉がわが国ではじめて記されたのも、……(中略)……1591年に島原の加津佐で出版された『サントスの御作業の内抜書』であるが、そのなかで何度か「ヒイロゾフィア」や「ヒイロゾホ」という言葉が使用されている。(藤田正勝「日本における「哲学」の受容」同 pp. 255-256)と、考えています。本論文中において、日本で横書きが伝わった頃としている時期は、明治時代を念頭に置いています。

7 抽象的な表現になってしまっていたようです。

本論文は、日本人の柔軟な思考力と澄んだ観察眼を端緒とする学問とはどのようなものか述べることを目的としているため、様々な試みを論文中で致し、「四」においては、表現の試みも致しました。

ご指摘いただいた「四」の始めの部分は、本論文の題名である「日本における学問誕生の契機」をどのようにとらえているか比喩的に表現し、日本において最古であるとされている随筆の冒頭を意識してまとめたものです。

本論文の着想は、「ギリシア哲学は前五世紀後半から前四世紀のアテナイで大成され完結を見たとする俯瞰図は、むしろまったく的外れではないにしても、あくまでも一つのパースペクティブを与えるものでしかあるまい。」(内山勝利「変貌する哲学史——ギリシア哲学世界から見えてくるもの」『哲学史の哲学』岩波書店 2009年 p. 4) から得ました。

そこで2000年、3000年後、地球上の思考方法は変貌してしまっていることもあり得、その時主流となっている学術論文の書き方は、令和時代に日本で始められたものである可能性もある。と考えたのです。一つの論文のあり方としてご容赦いただければ幸いです。

尚、昨今の日本学術会議に関する議論を考えると、今後より開かれた学術のあり方が求められると推測致します。この意味において、題材を身近でわかりやすいところに求めながら解析していく。ということも試みました。これは、全ての集団がつくる円が重なり合う核心部の要素の一つに「知を愛求す」という内面的な働き。という要素があるから相互に理解することが出来る。という本論文の主要な要素を追究した現段階での試みでもあります。

本論文では註釈をつけるにあたり、中村美知夫准教授に、チンパンジーの観察内容とサル学に関してのみ、ご確認いただきました。論文の根拠の示し方についても、今後検討したいと考えています。

【質問】 榎本啄杜 (関西大学)

① p. 1「人類に最も近い種であるチンパンジーが『知りたくて惹きつけられる』という内面

的な働きを持つということから、人類とチンパンジーの共通祖先もこの内面的な働きを獲得していた」について、人類とチンパンジーの両方が「知りたくて惹きつけられる」という内面的な働きをもっていることは、必ずしもその共通祖先が同じ内面的な働きを持っていることを結論づけないのではないのでしょうか。共通祖先はそのような働きを持っていなかったものの、そこから分岐して進化する過程で、人類とチンパンジーの両方がそのような働きを獲得した可能性もあるのではないかと思います。生物学にはあまり詳しくないので、生物学的な事実についての指摘ではなく、あくまで文と文の繋がりについての疑問です。

② 些末なことですが、p. 4「日本人がヨーロッパ文明を広く学び始めたのは、主に、哲学という訳語が日本で考案された頃からであろう」について、19 世紀半ばを想定していると思います。「広く学び始めた」の解釈にもよるかとは思いますが、一般的には16 世紀半ばからヨーロッパ文明が日本に流入しており、学ばれていたと言えるのではないのでしょうか（蘭学などが典型）。

③ p. 7「事実、現実として、現生人類は様々な合意を地球規模で成している。これは、過去に集団内全ての構成員で合意に基づいて生きた経験があることの証拠と見なせ（略）」について、前者は後者の証拠と見なせるのでしょうか。前者を見るだけで後者を特定できるということは、前者を引き起こすのは後者以外の何物でもないことになりそうですが、「仮に過去において集団内全ての構成員が合意に基づいて生きた経験がなかったとすると、現在地球規模で様々な合意を成しえることはなかっただろう」ということが言えるのでしょうか。直観的には、そのような経験が過去になかったとしても、現在合意を成すことは可能であるように思えました。

【回答】 船木みあさ（京都大学）

① ご指摘の通り、その可能性はあります。生物学的にも、分岐後にそのような進化をそれぞれの種が進化させたという可能性はあります。分岐後の進化の結果だとすると、両種が別々の進化をしたにもかかわらず、「知りたくて惹きつけられる」という形質をそれぞれに獲得したということになるので、その形質の獲得が生きていくのに必要とされるより強い要素であったと考えられます。

② ご指摘の通りです。本論文では、「広く」という言葉に、「現在のように」という含みを持たせていました。

③ ご指摘の可能性はあると思います。ただ、本論文では、ホモ・サピエンスが生息域を求

め、地球上に分散していった。という仮定を下敷きにしています。よってこのような考察になりました。